

弔い上げ

ねんじゆきの

夫の主治医はやわらかな言葉を選びつつ、「うちの病院の九階に緩和病棟（ホスピス）が出来たのですが、佐藤さんはまだ元気なうちにいられて好きな事をされるといいと思うんですがね」といった。

大腸がんが肺に転移し、現代医療で考えられる限りのさまざまな化学治療が施されたが、夫の体はもうどれも受け付けないほど弱っていた。主治医の言葉は、二年間に及ぶ肺がんとの戦いに終止符を打つということなのだ。

この提案をどんな気持ちで受けとめているのだろう。わたしは夫の表情を見ることができず、じつと俯いて聞いていたが、彼はすんなりホスピスに移ることを了承した。

「余命ひと月」と、わたしには秘かに言い渡されていたけれど、夫は数カ月、いや一年かなーと思っただのだろう、猛然と自分史の執筆に取り組み、ホスピスの一室は彼の書齋の様変わりした。

モルヒネの投与によって痛みはうまくコントロールされ、抗がん剤の副作用で起こる吐き気からも解放され、彼は朗らかにになり、熱心にペンを走らせていた。

いつのまにか栄養点滴もなくなり、体につながる管は、鼻に入れる酸素の管だけになった。わたしはこの俄か文筆家の秘書として、ここでずっと暮らしていけたらいいなあと願ったりもした。

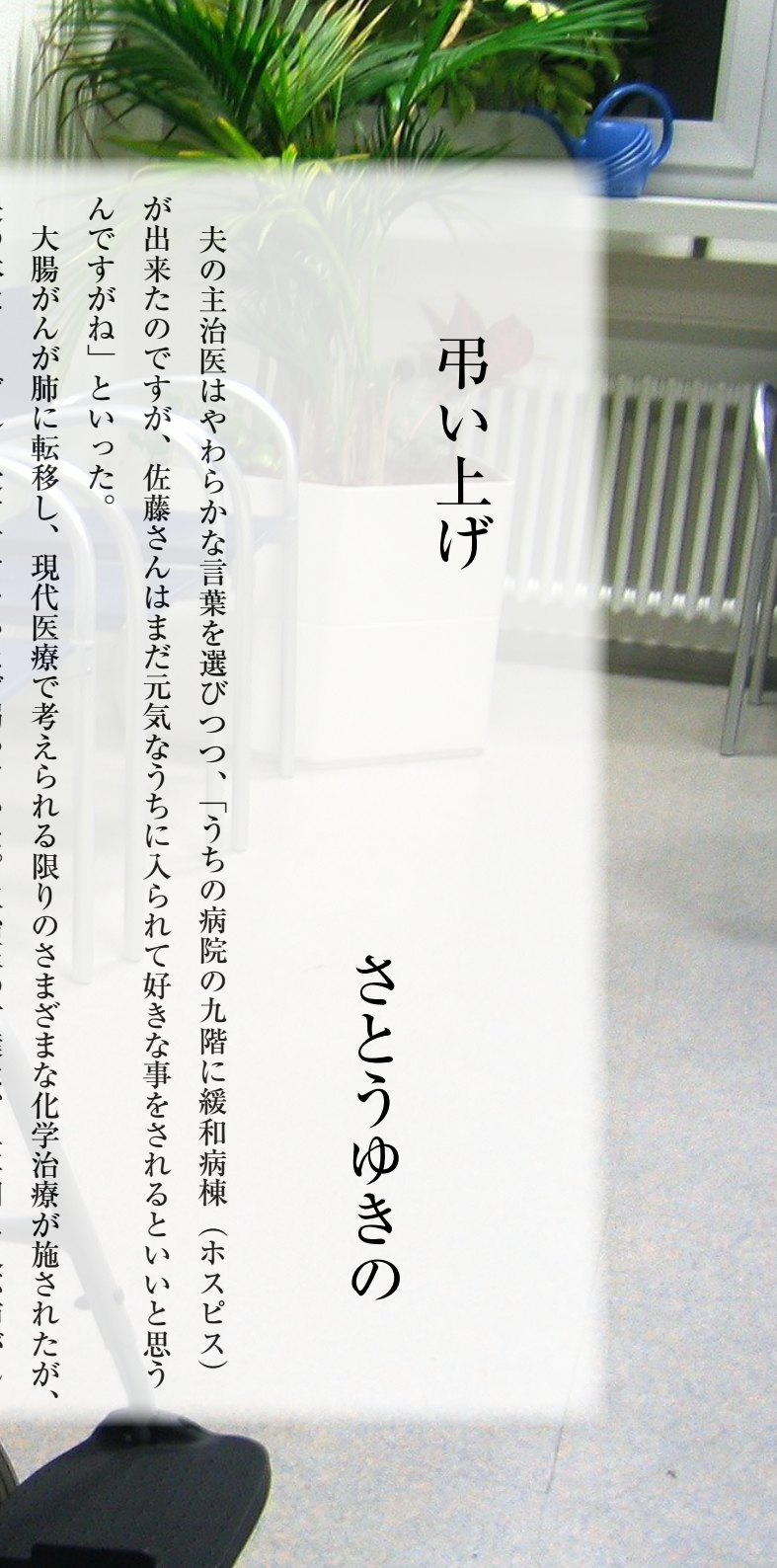
ただ、それはわたしが見せかけの平穩に騙されていただけで、夫の心境はめまぐるしく変化し、津波のように押し寄せてくる不安に抗っていたのだろう。自分史が母親の臨終の様子を綴るくんだりで、十九歳の頃の心境や周りの状況をまざまざと蘇らせ、ペンはぴたりと止まってしまったのだ。

なんとか書かせようと励ましても、わたしの言葉がすべて裏目に出て「きみまで、おれが母親を殺したというのか」と逆上した。

戦後、樺太（旧ソ連）に抑留されていた父親が突然帰ってきたが、小二の彼はどうしてもその人に懐けなくて、病弱な母親を困らせていた。父親との断絶は続き、誰にも相談せず大学受験し、失敗し、失意の時に母親が逝った。母親の葬儀の日、骨箱を抱えた彼に「母さんの死を早めたのはあんだだ」とつぶやいた長姉の言葉が胸に突き刺さった。

それから間もなく、彼は出奔した。二年間の放浪生活の終着駅が、博多だった。

弔い上げ



弔い上げ

ペンフレンドという付き合いでしかなかった男友だちが、突然わたしの下宿先に現れた時の驚きはいまでも鮮明に覚えている。

それから四十五年間、いろいろ困難もあったけれど、お互いにかけてがえのない伴侶として支えあつて暮らしてきた。

三人の息子に恵まれ、父親との和解もあった。父親とその後妻とを福岡に呼び、母親の遺骨も移した。

ねえ、どうして？

別れが差し迫っているというのにどうしてそんな恐ろしい目でわたしを見るの？

『死ななければならぬのはお前の方だろう。お前はただの一度もおれの気持ちを解ろうとしなかった。ずっとそうだった！』

病室に設えられた小さなキッチンにわたしを追い詰めて無言で威嚇する夫の目は、愛どころか、恨みと憤怒に燃えていた。

泣けばいいのだろうか。泣いてすがって、共に逝きましよう、といえばいいのか。この床に泣き崩れ、命乞いをすれば『このおれがいなくては生きていけないほどおれを愛している』と思えるのだろうか。

でも、出て来ないので、涙も言葉も。

お互いに疲れ果てて、夜明けに眠った。

弔い上げの話を夫が提案したのはその日から数日後だった。

「人の死後、五十年経ったら遺骨を墓地に撒くらしいね。お袋が死んで今年で四十九年しか経っていないけれど、おれ、それがしたいんだ。みんなが集まる今年のお盆に。いいだろう」真近に見る夫の睫毛に白髪一本無いのに、来年のお盆が待てないといっている。

「そうね……」

夫に背を向け、九階の窓から黒崎商店街の夜景を見下ろすと、光輝くネオンがいつせいにぼやけて揺れるのだった。

翌朝、お寺に電話して弔い上げの希望を伝えると、お盆は初盆の檀家回りで手一杯というのだ。それは仕方がないが、お坊様無しで弔い上げをするとすれば、どんな手順で、何がいるのだろうか。

思案にしていると、夫は「お墓の下見にいこう」といった。わたしに鍬、ボンコシ、ペンチ、釘、針金などのほかに花、線香まで用意させ、病院に外出許可をもらって、車で四十分ほどの霊園に向った。

運転しながらわたしは夫にくれぐれも力仕事はしないようにと念をおした。この炎天下で携帯酸素の管を鼻に突っ込んでいる病人が何をしでかすか心配でたまらない。

わたしは霊園に隣接する石屋に立ち寄り、助っ人をひとりお願いしたいと頼んでみた。

弔い上げ

髭のお爺さんが快く承知してくれ、ひよこひよこ車に近寄ってきたのに、夫はわたしからキーをもぎ取り車を発進させてしまった。

「いらん！ いらん！」と夫が叫んでいる。

わたしは汗だくで車を追いかけて、霊園の管理事務所に入っていく夫に追いつがった。

時ならぬ客の闖入に驚いていた管理人は、わたし達の事情を聞いて、すぐに腰をあげ、お墓への坂道を登ってくれた。

「納骨堂を見ますか？」の声に頷くと、管理人は足元の石室の蓋を手前にずらし、奥を覗くように指示した。半畳程の暗い空間に母親と父親と父親の後妻の骨壺が見えた。夫はこの三個すべてを弔い上げたいといった。

「今度、みなさんで来られる日は莫塵ごぼとさらしの袋三枚持ってきてください。一番早く亡くなられた方のお骨を骨壺からいったん出して、さらしの袋に入れてください。次の方のお骨も同じ様にします。最後の方が済んだら、納骨堂の中の土を少し掘り下げてください。あ、納骨堂の下は土です。コンクリートではありません。園芸用のシャベルで掘れます。お骨が丁度隠れる深さに掘ったら、一番の方から埋めてください。さらしの袋はいつしか土に溶けて、そのときお骨も土に戻ります。次に土を平らに均して、蓋を閉めましょう。この後、お花やお供え物を飾り線香を焚いて、お経をあげるのです。お坊様が来られないのならラジカセで、お経のテープを流されてはどうですか。お盆は事務所から拡声器で霊園じゅうに流しているので、無くても良かですけれど、気は心ですけんね」

真剣そのもので聞き入っていた夫は、途中から口を押さえ、込み上げる笑いを嘔み殺している。あまりに失礼な態度に管理人が怒りだすのではないかとほらはらしたが、ほんとうに優しい人なのだろう、その人も一緒に笑って「便利な世の中になったもんですたい」といった。

わたし達は早速、さらしを買うために商店街を目指して霊園を後にした。

車の中でも夫は上機嫌だったが、わたしは気味が悪く、なにがそんなに可笑しいのかと訊くと「教えない」とまた笑う。

笑いの謎はさらしを買っているときに解けた。土にばら撒くと思っていた骨が、一人分づつ纏まって土に埋めると分って、父親の後妻の骨と実母の骨が交り合うのが避けられる、それが嬉しい、と夫はいう。

逆立ちしても思い浮かばないこの発想こそが、わたしと夫の決定的な差異であり、夫がわたしの無理解を嘆くゆえんなのだ。

「おまえ、袋作れるのか？」

「馬鹿にしないで！」

今はこの侮辱に笑って応えよう。このご機嫌がずっとずっと続くなら。

弔い上げ

いよいよ弔い上げの日が来た。平成七年八月十四日、三台の車に分乗してやってきた佐藤家一族は、墓の前に大きなパラソルを広げ、折りたたみ椅子を置き、携帯用酸素ボンベとテープレコーダーを設置した。弔い上げの準備が整ったところで「さあ、お父さん」と三人の息子が指示を仰ぐ。くれぐれも手を出さず陣頭指揮だけの約束だ。ところがこのお父さん、じっと座っておるような人でない。鼻の管を打ち捨てて、納骨室の重い蓋に手を掛けようとするのだ。

「わかった、わかった。お父さん。僕たちがするから」

椅子に引き戻され、肩を押さえられても、三個の骨壺が姿を現すと、もう立ち上がっている。骨壺の蓋を裏返し、消えかかった戒名を確かめて「これを一番に」と呟く。

それが母親のものなのだろう。夫の肩越しに覗くと、壺の中は澄み切った水がなみなみと満ちて、真っ白い骨が沈んでいた。

壺を抱え上げて、その水を横の植木にこぼし、頭の骨と喉仏を手にとって、ようやく夫は壺を三男に托した。莫塵の代わりに持ってきたカーテンを敷いて、その上に骨が撒かれると、次はさらしの袋の出番だ。わたしは紐で縛れる巾着型の袋を作ってきていた。袋の口をあけて「さあ」とみんなに呼び掛けたが、誰も骨に触ろうとしない。孫たちにとって、生まれてはじめてみる人骨は白く、眩しく、触ればはらりと崩れてしまいそう。

「早くせんか！」

叔父さんの一喝に中学生の男孫だけが弾かれたように近寄ってきて、無言で骨を拾った。さらしの袋に落ちていく骨は、灼熱の太陽にやかれてすでに乾ききり、からからとからからと鳴った。

夫はその日から四十五日間生きて、自分史の出版を待ち侘びながら、逝った。